讀賣新聞　1月5日(日)朝刊掲載

讀賣新聞　定価(税込み)【朝夕刊月ぎめ4,800円】1部売り朝刊180円・夕刊70円　(第3種郵便物認可)

孤島の若先生と大先生

継ぐ つなぐ 2

父子 礼文の医療守る

北海道稚内市から西へ約60キロ、約2200人が住む礼文島。昨年12月中旬、日本海最北の離島にある「礼文町国民健康保険船泊診療所」には大勢の患者が訪れていた。「若先生と大先生がいてくれて安心です。この年になると、なかなか島の外には出られないから」。手術後の検査に訪れたという島で暮らす女性(93)がそう言って笑顔を見せた。

診療所長を務めるのは、島出身の升田晃生さん(39)。5年前に医師として戻り、それまで1人で診療を続けてきた父鉄三さん(70)と2人で島の医療を支える。「この島で最善を尽くす」。父の思いを継承し、患者と向き合う日々だ。

上患者を検査する所長の升田晃生さん（右）と父の鉄三さん　下吹雪の中、診療所の前に立つ晃生さん（右）と鉄三さん＝いずれも昨年12月11日、北海道礼文町で、古厩正樹撮影

町立の診療所は、昔から実家の向かいにある。子供の頃は、目の前に広がる診療所の駐車場で近所の友達と自転車を乗り回し、野球やサッカーで遊んでいた。

診療所にはひっきりなしに患者が訪れ、唯一の常勤医師だった父は忙しかった。キャッチボールに誘っても、何球か投げるとすぐに診療所から呼ばれて戻ってしまう。夕食もさっさと済ませ、食事が終われば書斎で医学書を読みふける。深夜でも診療所から電話があれば、慌ただしく家を飛び出して行った。

母と買い物に行ったスーパーではよく、「先生にお世話になりました」と声をかけられた。「医者は島の人にとって大切な仕事なのかな」。幼心にそう感じた。

小学校卒業後、島を離れて札幌市の中高一貫校に入学し、旭川医科大（北海道旭川市）に進学した。父から「医者になれ」と言われたことは一度もない。だが、幼い頃から見てきたその背中は大きかったのだと思う。「医者は世界に何十万人といるけれど、礼文の医療を知っているのは自分しかいない」と心を決めた。

礼文島から稚内市まではフェリーで片道約2時間。1日2～3往復しか運航していない。悪天候で欠航し、ヘリが飛べなくなることもある。だからこそ、どんな病気やけがにも対応できなければならない。専門の消化器外科だけでなく、内科や整形外科などの指導医にも頭を下げ、離島での医療を前提にした助言を求めた。

外科医としての研さんを積むため秋田県の病院で働いていた頃。悪性リンパ腫を患った父が、治療のため秋田に来た。約30年間、診療所で働いていた父も、数年後に定年を控えていた。

「礼文に帰ろうと思う」。この時初めて、自分の気持ちを伝えた。父は「あぁ、そうか」と答えてうなずくだけだったが、うれしそうな顔をしていた。

2020年の夏、約20年ぶりに島に戻った。いざ診療所で患者と接すると、思い通りにはいかなかった。最新医療の知識や技術を学んできた自負があったが、患者に塩分摂取量や体重管理を助言しても素直に聞いてもらえず、良かれと思って新しい薬を勧めても「大先生が出してくれた薬に戻してほしい」と言われた。容体が悪化し、島外の医療機関に患者を搬送しようとした時は、「島を出たくない」と拒否された。

一方、父の診察室に入った患者は、父の顔を見るだけで表情が和らぎ、いつも満足げに帰って行く。父との違いを考えると、暇さえあれば患者と話し込む父の姿が頭に浮かんだ。島の人たちの仕事や家族関係、生活習慣を把握した上で診察していたことに気づいた。

昨冬、島外の医療機関でも治る見込みがなく、島に戻ってきた進行がんの男性を診療所で受け入れた。できることは痛みを和らげることぐらい。とにかく毎日顔を出しては話しかけ、体調を気遣った。亡くなる直前、男性から礼を言われた。「最期まで付き添ってくれてありがとう。先生に出会えて良かった」。島民に寄り添い、最善を尽くす。父が大切にしてきた信念に触れた気がした。

父は22年3月に定年退職した後、診療所の嘱託医師になった。23年11月からの1年間は、潰瘍性大腸炎などの治療を受けるために不在となり、1人で診療所を回した。診療所に復帰した父は「息子をほめるわけじゃないけど、医療技術は素晴らしいし、患者への対応も自分より優れている」と目を細める。

実家の横にあるアパートで暮らし、緊急の電話が入れば、昼夜問わず部屋をすぐに飛び出す。かつての父のように。

父から子へ、最北の島医者のバトンは確かに受け継がれている。（塚本康平）